

◇ 同行会『歴史を歩く』

5月15日(水) 快晴 参加者21名+1名

～ツタと赤レンガの立教と、楽器の歴史を求めて～

池袋の喧騒の中を歩くこと10分。立教大学のキャンパスは、ゆったりとした穏やかな時間が流れていた。正門の左右にある、樹齢100年と言われる大きなヒマラヤ杉。その奥に見える緑のツタに覆われた赤レンガの本館(時計台)。映像などで見かける立教大学のシンボリック建物だ。キャンパスは樹木が多く、輝くような青葉がレンガの建物の渋い赤に映えて大変美しい。キャンパスマップを参考にしながら「チャペル」から見学。重い扉を開けると中からパイプオルガンの音が聞こえる。練習していたオルガニストが機転を利かせて、私たちの為に聞きなれたバッハの曲を弾いてくださった。心の奥底にまで深く響き渡るパイプオルガンの



音色に身を委ねて、しばらく聞きほれていた。時計台を抜けると、右側にすずかけ(プラタナス)の並木道があり、そこをモデルにして作曲された「鈴懸の径」の歌碑がある。立教卒の灰田勝彦氏により歌われた昭和のヒット曲だ。♪友と語らん鈴懸の径・・・♪と、皆で懐かしく口ずさんだ。次は歴史が展示されている「立教学院展示館」へ。ええっ?「本日休館」まさか?!開館していると思い込んでいました…みなさま、ごめんなさい!!見学できなかったのが、立教の歴史を一言。『米国聖公会の宣教師ウイリアムズが、1874年(明治7)築地明石町に立教の前身となる、聖書と英語を教える私塾を開

いた。(今年5月11日に創立150周年記念式典が行われた。)その後1918年(大正7)9月に池袋に移転して、翌年1919年5月に、レンガの建物が落成した。聖公会は英国国教会にルーツをもつ、プロテスタントの『キリスト教会』今日のランチは学食で。ここ第一食堂とチャペル、本館(時計台)、立教展示館は東京都選定歴史的建造物に指定されている。外壁のレンガや内部の造りは、1919年当時のまま残されている。第一食堂は、日本の古民家の西洋風バージョンといった感じだ。室内は少し暗めで、天井、壁、窓枠など全てに何とも言えない趣がある。木製のテーブルにユリのマークを施した椅子。そこに座り、長嶋茂雄氏も大好物だったというカツ丼をいただいた。



午後は江古田駅から徒歩5分の武蔵野音楽大学楽器ミュージアムへ。



古今東西の楽器を一堂に集めた博物館で、ガイドさん付きで見学。入口近くの豪華なグランドピアノに目を奪われた。黒の漆塗りに金泥で中国風の絵柄が描かれ、足の部分の装飾も美しく、見事というほかない。第一展示室は鍵盤楽器：古い年代順に、様々なピアノがたくさん置かれていて圧巻。18世紀の初め頃に発明され

たピアノは、鍵盤数も少なく音量も小さくて、貴族の館などで演奏され、ピアノフォルテと呼ばれていた。19世紀に入り、鍵盤数も現在と同じ88鍵になり音量も増え、コンサートホールで演奏されるようになった。チェンバロはピアノの前身で、白鍵と黒鍵が逆になっている。音量は小さいが華やかな音質で、宮廷文化の花形だった。第二展示室は管弦打楽器：フルート、トランペットなど馴染み深い楽器が、初期のものから順に壁面にずらっと飾られている。金管楽器は唇を振動させて音を出す楽器で、トランペットやホルンは金管楽器だ。木管楽器はそれ以外の方法で音を出す楽器で、フルート、クラリネット、サクソフォンなどで、管の材質は木とは限らない。弦楽器の代表はヴァイオリン。17~18世紀、イタリアのストラディバリウスが今日の形に確立した。日本の楽器展示室には、箏、三味線、尺八、琵琶など各種伝統音楽の楽器が展示されている。現在は宮内庁で伝承されている雅楽の笙(しょう)、篳篥(ひちりき)なども見る事ができた。一番好奇心を掻き立てられたのが、世界の民族楽器展示室。各地域の伝統的な楽



器をはじめ、少数民族が使用した希少な楽器などが、所狭しと並んでいる。インドネシアのガムランやスコットランドの衛兵のバグパイプなど知っているものもあるが、ほとんど見たこともない珍しい楽器だ。どんな民族が、何の為に使ったのだろうか？どんな音がするのだろうか？興味は尽きない。

私たちは文字を持たない古来から、喜怒哀楽だけでなく、神仏や自然への感謝、通信の手段や合図として、音を利用してきた。それが音楽へと結実していった事を思うと、感慨深いものがある。参加された皆さま、お疲れ様でした。そしてありがとうございました。

<報告 関根悦子>